

授業実践報告 古典を生涯にわたって学び続けるために

『枕草子』・『無名抄』・『去来抄』を通して

八木直子

1はじめに

私は、これまで公立高校を中心に多くの学校で教壇に立つてきた。また、現在は社会人講座で人生の先輩の方々と古典作品を読んでいる。古典学習入門の高校生と人生の機微を味わい尽くした年輩の人たちと同時進行で、古典文学を読むうちに、高等学校における知識習得の学習が、再び古典文学を学びたいという意欲増進の一端を担っていると強く感じることがある。

そこで、高校三年生を対象とした古典の授業を通して、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力」(教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(平成24年8月28日)の養成を目指した授業の実践とその課題について考察する。

2和歌および俳諧を通して学ぶ

平成25年度、大阪府立市岡高等学校三学年古典の授業では、古典学習の総仕上げとして、多種の古典作品を速読し、

受験でも通用する古典知識の養成を目的として授業を行った。同時に受験対策にとどまらず、各作品を通して、主人・先生・先師に対する尊敬の念、それらの人々の教えを書き残した意図を読むことにより、主体的に学び続ける姿勢を育むよう授業を進めた。

『枕草子』二月つごもりごろに

二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうて候ふ。」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の。」とてあるを見れば、懐紙に、

少し春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日の気色にいとよう合ひたるも、これが本は **a** いかでかつくべからむと、思ひ煩ひぬ。「誰々か。」と問へば、「それぞれ。」と言ふ。みないと恥づかしき中に、宰相の御いらへを、**b** いかでかことなしびに言ひ出でむと、心一

つに苦しきを、御前に御覽ぜさせむとすれど、上のおはしまして大殿ごもりたり。主殿司は、「とく、とく。」と言ふ。げに、遅うさへあらむは、いと取り所なければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。

これがことを聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ、内侍に奏してなさむ。』となむ、定めたまひし。」とばかりぞ、左兵衛督の、中将におはせし、語りたまひし。

まず、作品への導入として、便覧を参照しつつ文学史の内容を説明し、学習者の興味を喚起する。『枕草子』は、中学校で冒頭部を暗記しているため、生徒にとって親しみやすい作品だ。

本段の内容は、中宮定子に仕えていた作者清少納言が、当時一流の歌人である藤原公任から和歌の下の句を贈られ、中宮に相談できない状況で、当意即妙に上の句をこたえるというもの。学習目標は和歌の贈答における古典常識を理解すること、作者の心情を読み取ることの二点だ。授業では三時間で取り扱ったため、本文は要所のみを板書し、後は〈語句〉〈本文〉〈内容〉とまとめて板書しながら、「文法」「語句の意味」「現代語訳」については生徒に指名して答えさせた。

古典授業の要点

- 1 文学史：作品に親近感が持てるよう配慮する。教科書に掲載されていない部分の内容も合わせて説明する。
- 2 文法：模試・入試での得点対策として、「係り結びの法則」・「助動詞」・「敬語法」に必ず触れる。
- 3 語句：特に現代語と古語で意味が違うもの、漢字を当てると意味が取りやすいものには適宜漢字を当てて理解を促す。
- 4 内容：用言の意味を中心に、登場人物の心情を読み解いていく。また古典常識を確認する。

第一時間目の要点は、①諸芸に通じている才人の公任が詠んでよこした下の句「少し春ある心地こそすれ」について、作者は白居易の『白氏文集』の詩句「三時雲冷ややかにして多く雪を飛ばし、二月山寒うして少しく春有り」を踏まえていると見抜いている点、②上接している「二月山寒うして少しく春有り」と冒頭の「二月つごもりごろに、風いたう吹き、空いみじう暗きに、雪少しうち散りたるほど」と今日の空模様がぴったりであることに作者が感心していることに注意する。そのために（a）天候の描写、（b）公任が当世きつての和歌の第一人者であること、（c）白居易『白氏文集』が当時の貴族にとって教養書であったことを説明する。また、

作者の心の動きを順に捉えるため、公任からの手紙の詩句が今日の空模様実によく合っていると感じた「げに」、『白氏文集』「少有春」を踏まえることを見抜くものの、返歌に困惑する「思ひ煩ひぬ」に着目する。「思ひ煩ひぬ」の原因は、相手が歌道の大家であり、その読んだ句も『白氏文集』を踏まえた巧みなもので、それ相応の上の句が求められていることを考慮する。また、今回の予告として、作者は先方の同席者の顔ぶれを探り、対応の仕方の手掛かりにしようとしていることに触れる。

第二時間目は、前時の復習として、作者が「思ひ煩ひぬ」と感じた原因を生徒に説明させるところから始める。同席者が「恥づかしき」人々であることを知った作者は、「いかでかことなしびに言ひ出でむ」と決意することを読み取る。その際に、重要古語「恥づかし」（立派だ）と現代語「恥ずかしい」（みつともない）との違いに留意する。また、「いかで」（副詞）＋「か」（係助詞）の訳し方に注意する。係助詞「か」の解釈として、aは「思ひ煩ひぬ」とあることから、心中にて思い悩むわけだから疑問ととり、bはその後、中宮に相談するという行為から、作者は、自分が下手な返歌をしてしまうことにより、中宮の名誉を傷つけることになると考えている。以上のことから、「いい加減な返歌はできない」ということを強調するための反語表現と解釈する。

次に、なぜ作者がいい加減な返歌ができないと思った理由

を考えた。その手掛かりとして、「御前に御覽せさせむとすれど、上のおはしまして大殿ごもりたり。」の解釈に入る。『枕草子』において「御前」と出てきたら、中宮定子を指すことを説明し、敬語の「御覽ず」・「おはしまし」「大殿ごもり」の意味と人物関係の確認を合わせて行う。その際に重要なのは、返歌が上手にできないと、作者本人のみならず、仕えている中宮の不名誉となるため、和歌にも造詣の深い定子に相談しようとしている点に注目させることである。作者にとって、定子の存在は、「主人」という枠組みではなく、きらびやかな宮廷で過ごす憧れの存在であり、教養の面では、師と仰ぐほどの存在であった。二人の結び付きの強さが、『枕草子』執筆の動機に関わることを伝え、作品への理解を深める。

定子に頼ることができなかった清少納言は、心細いまま独力で返歌をする。「さへ（副助詞・添加、くまでも）」「さはれ（感動詞、なんとでもなれ）：思ひ切り」「わななくわななく書きて（震えながら書いて）：不安と緊張」「わびし（形容詞、つらい）」「ばや（終助詞・願望、くたい）」の単語の意味とともに、心情の変化をたどる。

また、作者が返した上の句「空寒み花にまがへて散る雪に」がどのような点で、優れているのか考えさせた。公任の下の句が白居易の詩句を踏まえていることを見抜き、その詩句中の「雲冷多飛雪 二月山寒」という表現を基に、「散る雪に」「空寒み」と詠んだ。さらに「雪」を「梅花」に見立てて、

〈語句〉・よみ〇意味◎文法

・二月 **きんづき**

〇つごもり (名) 月の下旬

〇黒戸 **女房たちの控え室**

・主殿司 **このもつかさ**

〇かうて候ふ **ごめんください**

・公任 **きんとう**

〇宰相 「参議」の中国風の呼称

〇げに (副) なるほど

〇恥ずかし (形) 気をくれるほど立派だ

気がひける

〈本文〉「いかでか」の扱いに注意する

a **これが本は副いかで係(疑)**

か 力下二・終

つ につく

く 適当・未

推量・体 **む**と、思ひ煩ひぬ。

(訳) この歌の上の句はどのような

付けるのがよいだらうかと思ひ悩んでしまった。読解上の要点

b **副いかで係(反)**

か

か ことなしびに言ひて出で **推量・体** (む)

(訳) どうしていい加減に言い出せようか、いやできない。

□は助詞
○は助動詞
傍線部は自立語

〈内容〉

公任の下の句「**少し春ある心地こそすれ**」

『白氏文集』「雲冷多飛雪二月山寒**少有春**」

← **作者**

見抜く(教養)

天候に合致と気付く(感性)

下の句の「春ある心地」へつなげる機知を發揮していること説明する。また、古典常識として、返歌では、相手の歌の典拠に理解を示すこと、言葉を踏襲して詠歌することを説明した。

文法事項としては、「空寒み」における「形容詞の語幹用法」を、「空(名詞)」+「寒(形容詞の語幹)」+「み」で原因・理由「**くが**：なので」と訳すことを確認した。また「奏す(絶対敬語)」は、「天皇・上皇に対して申し上げる」の意であり、敬語の正しい理解は場面把握の際に役立つ重要性を強調した。まとめとして、作者の詠んだ上の句は、俊賢らに「なほ、内侍に奏してなきむ」と言わせるほどの評価だった。内侍は、才能ある女性が就く職であり、さらに受領階級出身の作者にとっては、大変な名誉であった。『枕草子』は、時に「我褒め」の回想と解釈されるが、作者が語る手柄や誉れは、個人的なうぬぼれや自慢ではなく、定子へ帰属するものであったと考える。生徒たちには、単なる言葉の解釈にとどまらず、作品

の世界を身近に感じる話について、生徒の反応を見つつ伝えることが大切だ。

次に鴨長明の『無名抄』について、三大随筆『枕草子』との関連から説明し導入とする。鴨長明は随筆家としてだけでなく、『新古今和歌集』の編纂事業を行う和歌所の寄人に

〈板書2〉

〈語句〉

○御覧ず (サ変)

尊 御覧になる

○おはします

尊 尊 いらっしゃる

○大殿ごもる

尊 尊 お休みになる

○さはれ

尊 (感) どうとでもなれ

○紛ふ

尊 間違えるほどよく似ている

○わびし (形・シク) つらい

○聞かばや

終助詞・願望 くたい

◎奏す

(天皇・上皇に対して) 申し上げる

絶対敬語

「啓す」(皇后・皇太子に対して) 申し上げる

他に: 「行幸」「御幸」「崩御」「朕」

◎左兵衛督 同格の、中將におはせし、

傍線部どうしが同じ人物の説明になっているから、「の」は同格と解釈

任命されるほどの歌人であった。『無名抄』は長明が出家遁世した後、若い時から教えを受けた和歌の師俊恵の詠歌法を思

い出して書き記した歌論書である。

指導上の注意点は、人物関係を把握すること。その手がかりとして、まず、和歌の師俊恵と俊成が話し合った内容を、弟子で作者の鴨長明に語り、それを記していることを説明する。文法事項としては、会話文における謙讓表現の「たまふ」

〈本文〉

作者↓中宮

使役・未さ

意志・終 (む) と

*御前に御覧ぜ

作者↓帝

作者↓帝

すれ 接・逆説 どの

おはしまして大殿ごもりたり。

(訳) 中宮様に、お見せしようと思うが、帝がいらっしやてお休みになっている。

名詞形容詞「寒し」語幹接尾語

◎空 寒 み

〈内容〉

さはれ: 返事を催促され独力で、即興で返歌↓思い切りの良さ

・わななくわななく↓緊張と不安

・わびし、聞かばや↓評価を気にする

*個人的なうぬぼれ?

↓中宮定子周辺での文化的で教養に満ちたすばらしさを確かめるための回想

(下二段活用) をしっかりと理解させることだ。

『無名抄』俊成自賛歌のこと

俊恵いはく、「五条三位入道のもとにまうでたりしついでに、『御詠の中には、いづれをか優れたりと思す。よその人さまざまに定めはべれど、それをば用ゐはべるべからず。まさしく承らむと思ふ。』と聞こえしかば、

『夕されば野辺の秋風身にしてみてうづら鳴くなり深草の里これをなむ身にとりては面歌と思ひたまふる。』と言はれしを、俊恵、またいはく、『世にあまねく人の申しはべるは、

面影に花の姿を先立てて幾重越え来ぬ峰の白雲

これを優れたるやうに申しはべるはいかに。』と聞こゆれば、『いさ。よそにはさもや定めはべるらむ。知りたまへず。なほ自らは先の歌にはいひ比ぶべからず。』とぞ侍りし。「と語りて、これをうちうち申ししは、「かの歌は、『身にしてみて』といふ腰の句のいみじう無念におぼゆるなり。これほどになりぬる歌は、景気をいひ流して、ただ空に身にしみけむかしと思はせたるこそ、心にくくも優にも侍れ。いみじういひもてゆきて、歌の詮とすべきふしをさはといひ表したれば、むげにこと浅くなりぬる。」とて、その次に、「わが歌の中には、み吉野の山かき曇り雪降ればふもとの里はうち時雨つつこれをなむ、かのたぐひにせむと思ひたまふる。もし世の末

におぼつかなくいふ人もあらば、『かくこそいひしか。』と語りたまへ。」とぞ。

本教材は二時間で取り扱った。第一時間目は、人物関係の把握と、歌人にとつての「面歌」の概念について理解を深めることを目標とした。内容は、俊恵が俊成に代表歌を尋ね、俊成は『伊勢物語』を念頭に置いて詠んだ「夕されば…」を代表歌と答える。しかし、世間の人々は、「面影に…」を評価している。これに対し、俊成自身は「いひ比ぶべからず」自分が選んだ「ゆうされば…」の歌と「面影に…」の歌は比較にならないと述べる。そこで、「御詠(お詠みになった歌)」「面歌(代表歌)」をキーワードとして、俊成本人が挙げた代表歌と、世間一般で評価されている代表歌とが違うこと、そして俊成の代表歌への認識を理解する。俊成は当代随一の歌人であり、その代表歌についても世間では様々に言われているはずだ。生徒にとつては、「古典文学」は解説や辞書が必要な難解な内容である。そこで、八〇〇年前の歌人の「面歌」について理解を促すため、流行のロックグループを例に代表歌の概念について説明を試みた。(注1)

第二時間目は、面歌への俊成による自己評価と世間からの評価を通して、俊成の代表歌への俊恵の批判、その批判を通して俊恵が弟子兼好に伝えたかった和歌の創作態度を理解する。

俊成は世間の人々が挙げた面歌については、「いひ比ぶべか

らず」と具体的な理由は述べていない。しかし、俊成自身が代表歌として挙げた「夕されば…」については本文中で俊恵が批判的な評価を下していることに注意する。俊恵の詠歌態

〈板書3〉

〈語句〉「終止形」

○定め「定む」 設定する

○まさしく「まさし」 確かに

○夕され「夕さる」 夕方になる

○あまねく「あまねし」 広く行き渡る

○いさ さあどうか

〈本文〉

これを係・強意なむ、身にとりては面歌と思ひたまふる

ハ下二…謙讓語

敬意の方向
連体形 俊成→俊恵

〈内容〉

◎それよその人さまぎに定めはべれ

あまねく人の申しはべる

よそにはさもや定めはべるらむ↓自己評価と他評価

◎面歌

俊成||「夕されば…」(『伊勢物語』をモチーフに)

世の人||「面影に…」↓本人「いひ比ぶべからず」

↑俊恵の批判

度を読み取るキーワードとして、「うちうち(内輪に・密かに)・「腰の句(第三句)」・「無念に(残念だ)」・「景氣をいひ流して(風景をさらりと詠んで)」・「空に(なんとなく)」・「優に(優雅だ)」・「いひもてゆき(表現しすぎ)」・「歌の詮とすべきふし(和歌の眼目とすべき点)」・「さはと(はつきりそうである)」・「むげに(ひどく・とても)」を取り上げた。批判の根拠となるのは、以下の三点である。a『身にしてみて』といふ腰の句のいみじう無念におぼゆるなり(『身にしてみて』という和歌の第三句が非常に残念に思われるのだ)。b「景氣をいひ流して、ただ空に身にしみけむかしと思はせたるこそ、心にくくも優にも侍れ(風景をさらりと詠んで、ただなんとなく身にしみたであらうなあと感じさせるように詠むことが、奥ゆかしく優雅でもあります)」。c「いみじういひもてゆきて、歌の詮とすべきふしをさはといひ表したれば、むげにこと浅くなりぬる(俊成の代表歌は、ひどく表現しすぎて、和歌の眼目とすべき点を、はつきりそうであると言葉で表現してしまった)ので、全体の情趣がひどく底の浅いものとなってしまう」である。つまり、a「夕されば…」の歌の第三句「身にしてみて」が感情を直接的にはつきりと詠んでいて残念である。〈具体的な指摘〉b風景描写の中に、情感をなんとなく示唆し、読者に秋風が身にしみたのであろうと感じさせるのがよい。〈詠歌の際のあるべき姿勢〉c和歌の眼目となる点をはつきり歌に詠みこまないほうが心惹かれる(避け

るべき詠歌態度」。以上の俊恵の批評を踏まえ、俊恵自身の代表歌「み吉野の：（吉野山の辺り一面がどんより曇って雪が降ると、ふもとの里では時雨が降り続けることよ）」を通して、批判内容を確認し、俊恵が兼好に伝えたかった詠歌姿勢を理解する。

〈板書4〉

〈面歌〉

|| 腰の句↓「無念に」(俊恵)

夕されば野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里

(俊成)

み吉野の山かき曇り雪降ればふもとの里はうち時雨つつ

(俊恵)

← 自然の変化を客観的に捉える

|| 情感は風景描写の中になんとなく示唆

当時の歌壇で時代をリードしてきた藤原俊成の代表歌を通して、源俊恵は兼好に「うちうち」に「教えておきたかった詠歌姿勢は具体的に示した。一方で、景物を客観的に捉え、情感についてはさらりと詠んだ自身の代表歌を挙げ、自分たちの新しい和歌の境地を開こうとした。そして、兼好は師の意志を受け継ぎ後世に残すため記したという執筆の事情に触れ

てまとめとした。

次に、蕉門俳論書の代表『去来抄』『行く春を』を通して、「行く春を：」の歌に対する、①尚白の非難、②去来の反論、③芭蕉の賛意、④去来の賛意、⑤芭蕉による去来への期待を捉える。以上、二時間で取り扱った。

『去来抄』 行く春を

行く春を近江の人と惜しみけり 芭蕉

先師いはく、「尚白が難に『近江は丹波にも、行く春は行く歳にも振るべし。』といへり。汝、いかが聞きはべるや。」

去来いはく、「尚白が難当たらず。湖水朦朧として春を惜しむにたよりあるべし。ことに今日の上にはべる。」と申す。

先師いはく、「しかり。古人もこの国に春を愛すること、をさをさ都に劣らざるものを。」

去来いはく、「この一言、心に徹す。行く歳近江にゐたまはば、いかでかこの感ましまさむ。行く春丹波にいまさば、もとよりこの情浮かぶまじ。風光の人を感動せしむること、真なるかな。」と申す。

先師いはく、「去来、汝はともに風雅を語るべきものなり。」と、ことさらに悦びたまひけり。

導入の留意点として、a 向井去来は、蕉門十哲の一人で、

芭蕉に最も信頼されていた弟子であること。b『去来抄』は、蕉風俳諧の精神を後世に正しく伝えるために書かれた、問答体の俳論書であること。一時間目は、全文が、師である芭蕉（先師）と去来との問答形式であることを押える。さらに、①尚白の非難と②去来の反論した内容を理解する。

まず、尚白は「行く春を…」の句に対して、どのような点が欠点だと言っているのかを本文に即して読む。その際、「行く春（晩春の季語）」「難（非難、ここでは欠点）」「振る（入れ替える・置き換える）」の意味を生徒に調べさせ確認し、「近江は丹波にも、行く春は行く歳にも振るべし」を現代語訳させる。これは、「近江」は「丹波」に、「行く春」は「行く歳」に置き換えても句が成り立ち、表現の必然性を感じられないという尚白の指摘だ。この尚白の指摘に対して、去来の反論は以下の二点だ。a「湖水朦朧として春惜しむにたよりあるべし。」「近江」とあるのは、琵琶湖の水面がぼんやりと霞んで春の風情を惜しむゆかりがあるはずだ」b「今日の上にはべる（想像によって詠まれたものではなく、眼前の景色に基づく実感なのです）」すなわち、霞む琵琶湖の水辺が、惜春の情にふさわしい上に、眼前の景物を詠んでいるからと反論する。「行く春を…」の句の主題は、惜春の情であるから、琵琶湖のぼんやり春の霞んだ湖水の風景に感動し、その場にいたからこそ詠めた句であり、「近江」と「行く春」の組み合わせには必然性がある。

第二時間目は、重要語「しかり（その通りである）」「をさをさくざる（すこしもくはない）」「心に徹す（心にしみる）」「いかでか（連体形）（どうしてか、いやくない）」「風光（風景・景色）」「風雅（俳諧）」を通して、③芭蕉の賛意、④去来の賛意、⑤芭蕉による去来への期待を理解する。

芭蕉は「しかり」と述べ去来の意見に賛同している。その理由は、「古人もこの国に春を愛すること（昔の人も近江で琵琶湖の春を惜しんだ）」。そして、「をさをさを都に劣らざるものを（都で春を惜しんだのに少しも劣らないのに）」と言う。芭蕉は、琵琶湖で春を惜しむ気持ちは、文芸の伝統に基づいていること、その風情は都で春を惜しむ感慨に劣らないということだと言う。

そして芭蕉の言葉を、去来は「心に徹す」と受け、晩春に琵琶湖を眼前に詠んだ必然性を「いかでかこの感ましまさむ」と述べ、「風光の人を感動せしむること、真なるかな。」と、優れた自然の風景が人を感動させるといふ真実は、今も昔も変わらないと、その土地特有の風景と季節の情感を結びつけて詠むこと、すなわち眼前の自然を俳諧に織り交ぜる芭蕉の句作の意図を深く理解していたため、「去来、汝はともに風雅を語るべきものなり。」と、俳諧を共に語る者としてふさわしいと去来に期待を寄せた。

去来は、芭蕉の作意を十分に汲み、尚白の意見に対し、他の語の組み合わせでは成立し得ないと反論した。さらに、芭

蕉は古典的な着想を背景としたものと述べ、去来の深い理解に、師としての満足と悦びを表した。『去来抄』は低迷していた蕉門俳壇に、芭蕉が目指した俳諧の方向性を、芭蕉や同門の俳人たちが実際に述べた言葉によってまとめられたものだ。去来は、芭蕉の句作への深い理解によって、師から全幅の信頼を得ていた。

3 まとめ

以上、定子と清少納言、俊恵と兼好法師、芭蕉と去来という師弟関係（注2）を通して、師の意図を汲み、その教えを残したいという門人たちの思いをたどった。「和歌」および「俳諧」の創作や鑑賞という文学的な行為は、決して「個人」で完結できるものではなく、師から教えを受け、その考えを自分の中に徹底し、また、自分が誰かに伝えていく「循環」を意識した一連の行為である。その結果、紐帯を強めていく行為ということを軸に授業を展開した。

三学年における古典学習は、古典学習の集大成であるとともに、受験を見据えた指導が必要とされる。しかし、入試で得点できるテクニクに特化した内容では、本来の高校での古典学習の意義が伝わらない。また教える側にとっても閉塞感に陥る可能性がある。高校の古典学習には、我が国固有の伝統文化の継承という側面がある。生徒の多くは、高校での授業を最後に古典作品に触れず人生を送ることになる。再び

古典を読みたいと思えるか否かの重要な分岐点で、古典作品に対して、いい印象を残せるかどうかは、教員の力量次第だ。「言った」と「伝わった」では大きな差がある。私は、「言い放った」だけの授業ではなく、生徒に「伝わる」授業をしなければならぬと痛感する。教員には、生徒にとって抽象的な古典文学をより具体的で身近なことに引き寄せて、彼らが受け取りやすい概念や言葉に磨いて届ける工夫が求められている。日々、授業をしていて、生徒が内容を理解した瞬間の晴れやかな表情に出会った時ほど嬉しいことはない。今回は古典作品における師弟の結び付きを通して、主体的に学び続ける姿勢について考察した。しかし、生徒からの理解度を示す指標が無いなど、多くの課題を残すことになってしまった。今後は、アンケートや感想文などで生徒の理解度を調査し、裏付けを示したい。また、学校教育にとどまらず、古典を生涯にわたって学び続ける興味を喚起するための授業づくりについては、次に考察したい。

（注）

1 ロックグループ・ビーズの代表歌と言えば、一般的に水泳大会のテーマ曲となった「ウルトラソウル」を思い浮かべる人が多い。しかし、本人たちにとっては「オーシャン」や「ゴールド」かもしれない。幸い、生徒の中にビーズのファンがいたため、共感もあり、「面歌」について理解が得られた。

2「二月のつごもりのころに」の場面においては、定子と清少納言は、主従関係よりは師弟関係の面がクローズアップされていると考
るため、「師弟関係」との表現を用いた。

(参考文献)

『高等学校 古典(古文編)改訂版』中野幸一ほか 桐原書店 2
012・2

『コレクション日本歌人選 047 源平の武将歌人』上宇都ゆり
ほ 笠間書院 2012・6

『武士はなぜ歌を詠むのか―鎌倉將軍から戦国大名まで』小川剛生
角川叢書 2016・6